

テモテへの手紙 第二4章 パウロの最後の言葉

導入

- 今日はテモテの手紙第二の四章からメッセージをします。ここはパウロの最後の書簡の最後の章であり、パウロ自身も最後であることを意識しているので、とても深い思いが詰まっています。パウロの思いを一言も逃すまいという思いをもって読み進めていきましょう。

1,神の御前で、また、生きている人と死んだ人をさばかれるキリスト・イエスの御前で、その現れとその御国を思いながら、私は厳かに命じます。

- 1節。パウロはキリストの裁きの御座の状況を思い描いています。つまり、第二コリント5:10の「私たちはみな、善であれ悪であれ、それぞれ肉体においてした行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座の前に現れなければならないのです」を思い描いているのです。
- キリストの十字架による贖いにより、私達の罪は過去から未来にかけてすべて赦されています。しかし、信仰をもっている者がすべて同じ状態になるのではなく、この世での行いに応じて報いが与えられます。もうすぐ殉教して、この世の命がなくなるパウロにとって、最も気になるのはキリストの裁きで得られる報いです。
- 救われている者が目指すのは如何に多く天に宝を積むかです。ただ、神様にとっての良い行いとは何であるかは、はっきりとわかりません。人それぞれによって違うと思います。
- たくさんの人を救いに導くとか、悩んでいる人を御言葉で励ますことは、もちろん大きなポイントになると思いますが、最も大きポイントになるのは日々の心の向きだと思います。どんな時にも神様の恵みに心を向けて、満足して生きていることだと思います。神様のことを考え、コツコツポイントを貯めましょう。

2,みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。忍耐の限りを尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。

- 2節。この聖句も有名であり、どんな時でも救われている者の義務として、伝道に励むことの大切さをあらわしています。
- ただ、パウロが言っているのは、福音の内容を伝えるのではなく、みことばを伝えることであることを忘れないでください。3:16に書かれているように、聖書の言葉にはすべて神の息がかけられているので、力があります。聖書の内容をわかりやすく要約して伝え、みことばに含まれている神の力は伝わりません。聖書の解説はすべきですが、みことばを伝えるのを忘れないでください。
- 「忍耐の限りを尽くし」と書いていますが、伝道する者は必ず迫害にあうことを覚悟しなさいと忠告しているだけでなく、忍耐の中でも主にある喜びをあらわすことで、敬虔な状態になり、神の臨在を示すことができるということを意味しています。
- そして、みことばを伝え、教えるだけでなく、「責め、戒め、勧め」までするように命じています。これは神の道から外れている人を正しい道に戻すことをあらわしています。みことばを聞いて自分の間違いに気づく人は多いのですが、それで終わって何も変わらない人がほとんどのように思います。間違いを悔い改めて、正しい道に戻るまで、サポートし続けることが大切です。

3,というのは、人々が健全な教えに耐えられなくなり、耳に心地よい話を聞こうと、自分の好みにしたがって自分たちのために教師を寄せ集め、4,真理から耳を背け、作り話にそれて行くような時代になるからです。

- 3-4節。パウロは終わりの時の状況として、人々を次のようになると予想しています。
 - 健全な教えに耐えられなくなる、
 - 耳に心地よい話を聞こうとする、
 - 自分の好みに従う、
 - 真理から耳を背ける、
 - 作り話にそれる
- パウロは未来形で書いていますが、イスラエルの誕生など終わりの時の特徴を見ると、現在は既に終わりの時の只中にいます。従って、ここに書かれている人々の墮落は現在起こっています。悪霊の働きが人々の墮落の原因ですが、神様も人々の墮落を許容しており、結果として人々の墮落は神の計画の一部とも言えます。

- 教会は人が集まってきてはじめてたて上げられるものです。だから、教会は商店と同じような位置付けにあります。店主は多くの人に来てもらうためにまずすべきことは、客のニーズを把握することです。
- 私も牧師として人々のニーズを把握しようと最初の頃は努力していました。しかし、人々のニーズは健全な教えでない耳に心地よい話であることに気づいた時、別に人が来なくても良いから健全な教えに徹しようと考えました。
- 「耳心地が悪くても健全な教えを聞いて神様のことをもっと知りたい」という人々は年々減少していくでしょう。しかし、それにも屈せず、耳心地の悪くても健全な教えを宣べ伝えましょう。

5,けれども、あなたはどんな場合にも慎んで、苦難に耐え、伝道者の働きをなし、自分の務めを十分に果たしなさい。

- 5節。パウロはそんな人々の墮落した状況に対して、「どんな場合でも慎んでいる」ように勧めています。
- 人々にどんなに否定されても怒らず慎んで温厚に生きるにはどうしたら良いのでしょうか。それは神様だけに注目することです。それが「自分の務めを十分に果たす」ということです。
- 我々はどうしても結果を見て立ち止まり、苛立ってしまいます。聖書に「人々が健全な教えに耐えられなくなり、耳に心地よい話を聞こうとする」と書いているのですから、人々に否定されることが当たり前ののです。神の召命だけを見て、黙々と自分の役割を果たすことが大切です。

6,私はすでに注ぎのささげ物となっています。私が世を去る時が来ました。7,私は勇敢に戦い抜き、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。8,あとは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。その日には、正しいさばき主である主が、それを私に授けてくださいます。私だけでなく、主の現れを慕い求めている人には、だれにでも授けてくださるのです。

- 6-8節。パウロは自分のことを注ぎのささげ物に例え、もう一度自分の死が近いことを告げます。注ぎの供え物とは、供え物にかけけるぶどう酒のことで(民数記15:10)、ぶどう酒のようにパウロの血が流れ、殉教することを表しています。
- パウロはイエス様に出会ってから道のりに何の悔いもありませんでした。パウロが自信家であったのではありません。また、失敗がなかった訳ではありません。何度も失敗しましたが、それでも悔いることは何もなかったのです。
- なぜなら、パウロの下から去っていった者はパウロの教え方が悪かったのではなく、神様が選んでいない人であったと考えているからです。神だけを見上げ、困難な時を乗り越えましょう。

9,あなたは、何とかして早く私のところに来てください。

- 9節。パウロはテモテに早くパウロのところに来るように言います。後述するように、ルカ以外の人とは離れて行ったので、寂しいということもありますが、もうすぐ殉教して死ぬので、その前にどうしても直接会って、書簡では言えないことを言いたかったのだと思われます。

10,デマスは今の世を愛し、私を見捨ててテサロニケに行ってしまいました。また、クレスケンスはガラテヤに、テトスはダルマティアに行きました。

- 10節。パウロの元を去ったデマス、クレスケンス、テトスについて書いています。
- クレスケンスは他の書簡には登場しないので、詳細はわかりません。
- テトスはクレタ島で伝道していると書かれているので(テトス1:5)、クレタ島の宣教を終えてダルマティアに移動したのだと思われます。
- デマスはピレモンの手紙で、パウロの同労者として紹介されているので、かつてはパウロが信頼する人物でした。しかし、「今の世を愛し、私を見捨ててテサロニケに行った」と書かれているので、単にパウロの元から去ったのではなく、廃教したのです。
- 信仰とは神様が与えるものであるもので、一度与えられた信仰が取り去られることはありません。デマスは最初から信仰がなかったのです。パウロの話しを聞き、感動し、理解していたのですが、信じていなかったのです。
- パウロですらデマスが真の信仰をもっていないことに気づかなかったのだから、信仰があるかないかを見分けることは困難なことです。

- デマスは神よりもこの世を愛していたので廃教しました。そういう意味では「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません(マタイ10:37)」が自分の信仰の有無を吟味するためにふさわしい聖句です。自信をもって神を一番愛していると言えるように、神からの恵みを受けましょう。

11,ルカだけが私とともにいます。マルコを伴って、一緒に来てください。彼は私の務めのために役に立つからです。
12,私はティキコをエペソに遣わしました。

- 11-12節。ティキコはアジア人のパウロの同労者であり、コロサイの手紙やピリピの手紙を届けた人物です。また、マルコは第一次伝道旅行では、パウロと反目して別れたが、その後仲直りし、パウロがローマに最初に幽囚されていた時は、パウロとともにいました。ルカはパウロとともにローマで殉教したという説と、その後ギリシアに行きそこで病死した説があり、はっきりとわかっていません。

13,あなたが来るとき、トロアスでカルポのところに置いてきた外套を持って来てください。また書物、特に羊皮紙の物を持って来てください。

- 13節。パウロはテモテにトロアスのカルポのところに置いてある外套と羊皮紙の書物をもって来るように頼みます。
- この書物が何であったのかは明らかではありませんが、多分旧約聖書の写本であったと思われます。パウロはもうすぐ死ぬことがわかっていても、聖書を読み続けたかったのです。
- これ以上知識をつけても誰にも伝えることができないのに、パウロはなぜ聖書を読み続けたかったのでしょうか。私は聖書を通して神様とお話したかったのだと思います。聖書の言葉には神の息がかかっているの、読む度に神様と対話することができます。特に今まで知らなかった新しい真理に出会った時は、飛びあがるほど嬉しいものです。
- 私を含めて多くの牧師は神様に会いたいという思いだけで、説教を毎週作っています。だから、多くの人に聞いて欲しいという願望はあまりありません。自分で見つけた神様のことをメモって話しているだけなのだから、聞く人がどう思おうか興味ないのです。
- 聖書は本当に不思議な本です。パウロも手元に置きたかったように、スマホの中だけでなく、紙の聖書を是非一冊手元に置きましょう。

14,銅細工人のアレクサンドロが私をひどく苦しめました。その行いに応じて、主が彼に報いられます。15,あなたも彼を警戒しなさい。彼は私たちのことばに激しく逆らったからです。

- 14-15節。ここに登場するアレクサンドロは第一テモテ1:20に登場するアレクサンドロと同一人物と思われます。そこには、健全な良心を捨てて、信仰の破船にあり、神を冒瀆して、サタンに引き渡したと書かれているので、アレキサンドロは前述のデマスと同じように廃教したのだと思われます。
- アレキサンドロは廃教しただけでなく、パウロを非難して、パウロの宣教の邪魔をしたのだと思われます。パウロは彼を「その行いに応じて、主が彼に報いられる」ことを願っています。神罰を願うとは愛なる行為ではなく聖書に反することだと思われかもしれませんが、そうではありません。アレキサンドロはパウロだけでなく神を冒瀆したのです。そういう人は罰せられるべきなのです。

16,私の最初の弁明の際、だれも私を支持してくれず、みな私を見捨ててしまいました。どうか、その責任を彼らが負わせられることがありませんように。

- 16節。パウロはネロの前で弁明しましたが、誰もパウロを支持してくれませんでした。この弁明とは使徒の働き28章に書かれている第一回目の獄中生活の弁明ではなく、二回目の獄中生活の第一回目の弁明であったと思われます。
- しかし、パウロはアレキサンドロの場合と違い、今回は「その責任を彼らが負わせられることがありませんように」と彼らが罰せられないように願っています。
- この違いはアレキサンドロは神を冒瀆したのに対して、弁明でパウロを支持してくれなかった人々は神を冒瀆していないということです。ただ、これはアレキサンドロは信仰がなかったが、パウロの弁明をしなかった人々は信仰があったと言うことができます。

- イエスは「人はどんな罪も冒瀆も赦していただけますが、御霊に対する冒瀆は赦されません(マタイ12:31)」と書かれているので、信仰をもっても赦されない罪はあると考え、悩んでいる人がたまにいます。しかし、信仰が与えられた人が神を冒瀆することは不可能であり、従って赦されない罪もありません。

17,しかし、主は私とともに立ち、私に力を与えてくださいました。それは、私を通してみことばが余すところなく宣べ伝えられ、すべての国の人々がみことばを聞くようになるためでした。こうして私は獅子の口から救い出されたのです。18,主は私を、どんな悪しきわざからも救い出し、無事、天にある御国に入れてくださいます。主に栄光が世々限りなくありますように。アーメン。

- 17-18節。パウロは弁明の時、誰も助けくれませんでした。だから、すべて自分でしなければなりません。しかし、それがすべての人々が福音を聞く機会となったのです。
- パウロの弁明を誰が聞いていたかは明らかではありません。多分、ネロはいたと思われますが、すべての国々の人々が傍聴していたというのは誇張した表現かもしれません。しかし、今までパウロが接したことのない国々の人々が傍聴しており、福音を聞く機会になったのは事実であったと思われます。また、「主は私を獅子の口から救い出された」とは弁明が受け入れられてパウロが釈放されることを意味しているのではありません。異邦人に福音を伝えるというパウロの使命が幽閉により実行できない状態であったのが、弁明することで実行できたことを救い出されたと表現したのです。
- パウロにとっては自分の死よりも福音が世界中に広がることの方が重要だったのです。ここまで聞いて多くの人はクリスチャンにとって最も大切なのは伝道することであることに気づくと思います。それはその通りであり、パウロのように伝道に熱く燃えている人がパウロの死後も現れ続けていたら、今頃はイエス・キリストは再臨していることでしょう。
- しかし、パウロは単に一生懸命に伝道しろと言っているのではありません。パウロは自分のこの世での命が救われないのにも関わらず何度も救われたと言っているのは、この世の命にこだわっていない姿を示しながら一生懸命伝道しろと言っているのです。単にイエスの十字架の贖いによって罪が赦され永遠の命が与えられることを伝えるのではなく、永遠の命をもっている証拠として、死に対して何の恐怖もないことを示せと言っているのです。

19,プリスカとアキラによろしく。また、オネシポロの家族によろしく。20,エラストはコリントにとどまり、病気のトロフィモはミレトスに残して来ました。21,何とかして冬になる前に来てください。ユブロ、プデス、リノス、クラウディア、そしてすべての兄弟たちが、あなたによろしくと言っています。

- 19-21節。パウロは最後に様々な人に別れのあいさつをします。
- 最初はプリスカとアキラです。彼らはユダヤ人の夫婦です。一緒に天幕張りをしていた夫婦で、この時はエペソにいて家の教会をしていました。最初は夫のアキラが最初に書かれていましたが、プリスカの方がパウロの宣教に貢献していたのだと思われ、妻のプリスカが最初に書いています。パウロは少しも女性を見下げてはおらず、優秀な女性はどんどん用いていたのが呼び方にも現れています。
- オネシポロはローマで捉えられているパウロを訪問して励ました人です。オネシポロの家族と書かれているので、本人は既に亡くなっているのだと思われます。
- トロフィモは病気のためミレトスに残して来たと言われています。パウロは使徒として病を癒す賜物が与えられていました。しかし、すべての病気を癒せたのではありません。トロフィモの病気も癒せなかったし、パウロ自身の病気も癒せませんでした。パウロは自分の病の癒やしについて三度祈った時、主は「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである(コリント第二12:9)」言われました。つまり、病気が癒やされることも恵みであり、癒されないことも恵みなのです。私達の理解を超えているかもしれませんが、だから神様なのです。すべてを受け入れることが大切です。
- 最後にもう一度テモテに冬になる前に来るように念を押します。冬になると水が凍り春まで待たないといけなくなり、パウロの命はそこまでないと考えられたので、早く来るように促したのです。

22,主があなたの霊とともにいてくださいますように。恵みがあなたがたとともにありますように

- 22節。パウロは最後のあいさつとして、「主があなたの霊とともにいてくださいますように」と願っています。「主があなたとともに」ではなく、「主の霊があなたとともに」ではなく、「主があなたの霊とともに」と書いているところにパウロの思いが現れていると思います。

- エペソ3:16に「どうか御父が、その栄光の豊かさにしたがって、内なる人に働く御霊により、力をもってあなたがたを強めてくださいますように」とパウロは言っているように、内なる人(私達の霊)と主の霊(聖霊、御霊)の交わりによって私達は強められ、新しく変えられていきます。
- ところが、多くの人は神は霊であることは認識しているものの、人間の霊については無頓着であり、人間は体と心でできていると考えています。そうではなく、人間は体と心と霊(内なる人)でできていて、神の霊と人の霊が対話することによって、人間は神の臨在を感じることができるのです。パウロは人々がもっと自分の霊の存在を意識するように、こういう表現をしたのだと思われます。
- そして、「恵みがあなたがたとともにありますように」と締めくくっています。これはテモテ個人に対する手紙であるのにも関わらず、「あなたがた」と複数形になっているところがポイントです。実は第一テモテの手紙も、テスの手紙も、ピレモンの手紙も個人宛書簡であるにも関わらず、あなたがたと複数形で終わっています。これはパウロは読者を教会の信徒をすべてを対象にしているのがわかります。
- これはパウロの書簡のほとんどに言えますが、最初のあいさつでは「恵みがあなたがたにあるように」となっており、最後のあいさつでは「恵みがあなたがたとともにあるように」となっています。つまり、to you で始まり with you 終わっているのです。to you とは受けるにふさわしくない私達に対して一方的に与えてくれる恵みを意味しており、with you とは恵みと一体になることであり、私達にとって良くて悪くてもすべてを恵みとして受け取ることを意味しているように思います。苦難の中にも恵みとして受け取り満たされましょう。

まとめ

- **みことばを宣べ伝えなさい。時が良くて悪くてもしっかりやりなさい**
 - 単にどんな時でも伝道することを勧めているのではなく、御言葉の力によって人を変えることが大切
- **あなたはどんな場合にも慎んで、苦難に耐え、伝道者の働きをなし、自分の務めを十分に果たしなさい**
 - 終わりの時代には健全な教えは嫌われます。人ではなく神だけを見て黙々と使命を果たすことが大切
- **私は勇敢に戦い抜き、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました**
 - パウロの同労資者の何人かは信仰を捨てる結果になりましたが、彼にはまったく悔いはありませんでした。なぜなら、パウロはすべては神の選びによることがわかっていたからです。
- **また書物、特に羊皮紙の物を持って来てください**
 - パウロは聖書を読みながら死を迎えたかったのです。なぜなら、聖書を通して神と対話できるからです
- **しかし、主は私とともに立ち、私に力を与えてくださいました。それは、私を通してみことばが余すところなく宣べ伝えられ、すべての国の人々がみことばを聞くようになるためでした。**
 - パウロの裁判には誰も助けくれませんでした。それが世界中の人々に福音を伝える祝福をもたらしました。災いをも益に変える神の力を信じましょう
- **主は私を、どんな悪しきわざからも救い出し、無事、天にある御国に入れてくださいます**
 - パウロの命は救われませんでした。彼は弁明を通して救われたと感じました。パウロのように永遠の命を伝える者は、自分の死にも無頓着になり、ただ使命だけを追求することが必要
- **主があなたの霊とともにいてくださいますように**
 - 私達には体と心だけでなく、霊も宿っています。私達の霊が聖霊と結びつく時、神の臨在を感じることができるのです
- **恵みがあなたがたとともにありますように**
 - テモテ個人宛の手紙にも関わらず、パウロはみんなのことを考えていました。恵みとともにいるとは、すべてが恵みとして受け入れて生きる神との一体をあらわしています